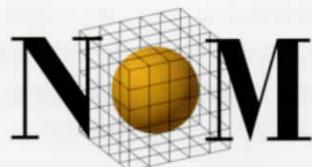


雪椿通信



牛腸茂雄
《SELF AND OTHERS》より
1977年

新潟県加茂市出身の牛腸は36歳で夭折するまでに三冊の写真集を発表しましたが、そのうちの一冊が《SELF AND OTHERS》です。そこに収められた60点の作品は、他の二冊の写真集の作品と異なり、被写体の人物たちが物理的にも精神的にも撮影者により近い位置にいるように感じられます。写真集の最後に引用された精神科医R.D.レインの著作『経験の政治学』の一節が示すように、この頃の牛腸は精神病に非常に興味を持っていました。自己と他者との関係を真摯に見つめ直そうとする作者の姿勢が、この写真のような被写体との関係性へと結実したといえるでしょう。本写真集によって、牛腸は1978年の木村伊兵衛賞の最終候補となり、また日本写真協会賞新人賞を受賞しています。

特集：	工芸に親しむ芸術の秋～2つの企画展より～	P2-3
学芸員レポート：	災害と展覧会—中越沖地震の報告または反省として	P4
所蔵品紹介：	マックス・ベックマン作版画集〈年の市〉	P5
あしあと：普及活動報告		P6
美術雑筆：運慶の当たり年		P7
イベント情報		P8

工芸に親しむ芸術の秋 ～2つの企画展より～

新潟と重要無形文化財

本展では、1954年に制度が確立されてから指定・認定された歴代すべての重要無形文化財保持者・保持団体による、陶芸、染織、金工など9分野の伝統工芸の名品約170点をご紹介します。新潟にゆかりのある重要無形文化財として、無名異焼の五代伊藤赤水、青磁の三浦小平二、蠅型鋳造の佐々木象堂、日本刀の天田昭次、そして越後上布・小千谷縮布技術保存協会の作品も展示されています。

展覧会をご覧いただくにあたり、まずは「重要無形文化財」とは何かということについて、新潟の工芸と関連づけながらお話ししてみたいと思います。無形文化財は戦後1950年に制定された文化財保護法ではじめてその保護の対象とされ、4年後の改正によって重要無形文化財の指定・認定制度が確立しました。「演劇、音楽、工芸技術その他の無形の文化的所産で我が国にとって歴史上又は芸術上価値の高いもの」というのがその定義で、すぐれた技術を「指定」し、その技術をもった保持者(通称「人間国宝」)を「認定」する、という制度です。

はじめて人間国宝が生まれたのは1955年のことで、富本憲吉、浜田庄司、松田権六など、いまも知名度の高い人間国宝はこのとき認定されました。本県ではじめて人間国宝となったのは佐々木象堂(1960年認定)です。なお、保持者の認定は死去によって取り消されます。冒頭で挙げた4個人・1団体のうち、故人の佐々木象堂と三浦小平二はすでに解除されています。

1975年の法改正では「保持者」=個人に加えて「保持団体」=グループの認定も制度化されました。小千谷縮・越後上布については、すでに1955年に重要無形文化財に指定されていましたが、技術保存協会が保持団体として認定されたのは改正後1976のことです。

過去に優れた功績をのこした個人を顕彰する「文化勲章」制度等とは異なり、「重要無形文化財」制度では「わざ」そのものが対象であり、将来へのわざの継承を目的としている



五代伊藤赤水 無名異焼上花紋鉢 1997年 文化庁蔵

ます。しかし、「重要無形文化財保持者」の通称としてもしろ認知度の高い「人間国宝」という呼び方には、単に「わざ」だけではなく、その人物の品性・品格をも重視する傾向があるように思われます。最近世間を騒がせている横綱の「品格」問題とも似ています。美術奨励政



佐々木象堂 蠅型鋳銅置物 蟻鳥 1958年
東京国立近代美術館蔵

策の先駆けである戦前の「帝室技芸員」制度(1890年制定)でも、人格・技倆ともに優れた美術家が推薦されてきた経緯があります。

ところで、伝統工芸は美術や伝統技能であるばかりでなく、地域経済を支えてきた「産業」でもあります。経済産業大臣が指定する「伝統的工芸品」(亀倉雄策の「伝統マーク」が有名です)には、本県の燕錠起銅器、村上木彫堆朱、白根の仏壇、加茂の桐箪笥なども含まれていて、重要無形文化財だけではなく切れない新潟の伝統工芸の奥深さ、幅広さを教えてくれます。この展覧会が、伝統工芸の多面性や保護制度の重要性を実感していただくきっかけとなれば幸いです。

(美術学芸員 長嶋圭哉)

「日本のわざと美」展 —重要無形文化財とそれを支える人々—

会期 2007年10月6日(土)～11月11日(日)

*会期中、一部展示替えを行います。

休館日 月曜日(ただし、10月8日、15日、11月5日は開館、10月9日は休館)

観覧料 一般 800円(700円)

高大生 600円(500円)

小中生 400円(300円)

*内は20名以上の団体料金

*土日祝日は小中生無料

*障害者手帳をお持ちの方は無料(受付でご提示下さい)

映画鑑賞会 11月3日(祝・土) 講堂にて 鑑賞無料

重要無形文化財(工芸技術)記録映画より

10:00～「鎌全・齋藤明のわざ」／「友禅・森口華弘のわざ」

「萩焼—十一代三輪休雪の鬼萩—」

14:00～「茶の湯釜—角谷一圭のわざ」

「竹工芸—飯塚小升齋のわざ」

「蝶細—北村昭斎のわざ」

講演会 10月6日(土) 14:00～ 講堂にて 聴講無料

「金山の島佐渡 200年焼き継がれているうつわ 無名異」

講師：五代伊藤赤水氏(重要無形文化財「無名異焼」保持者)

11月10日(土) 14:00～ 講堂にて 聴講無料

「鉄(くろがね)の美を求めて」

講師：天田昭次氏(重要無形文化財「日本刀」保持者)

製作実演 10:00～16:00 企画展示室前にて

無料(「日本のわざと美」展の観覧券が必要です)

10月13日(土)・14日(日) 伊勢型紙技術保存会による型紙彫りの製作実演

10月20日(土)・21日(日) 越後上布・小千谷縮布技術保存協会による糸作り

・耕作り・機織りの製作実演

陶磁器の東西交流

金沢は、加賀藩前田家の時代より、茶の湯の盛んな土地として知られています。この文化を反映し、石川県立美術館では数々の茶道具の名品を所蔵しており、これらは本展の出品作の中でも重要な位置を占めています。ここではその中から《和蘭陀白雁香合》と《和蘭陀色絵貞葉水指》の2点をご紹介します。

茶道具といつてもこの2点は日本や中国で作られたものではなく、作品名が示すとおり、オランダで作られた陶器で、通称「デルフト陶」と呼ばれるものです。江戸時代初期、日本と交易のあったオランダ船によってもたらされたものと考えられています。

イタリアのマヨリカ陶の技法をその起源とするデルフト陶の発展に、中国や日本の磁器が深く関わりをもっていたことをご存じの方は多いかもしれません。オランダが1602年に設立した東インド会社の貿易船が東洋から舶載してきた白地に青で絵付けされた薄手の磁器は、オランダを中心に当時のヨーロッパで大変な人気を博しました。これらに競合するため、あるいは輸入品だけでは満たすことのできないその需要を補うため、デルフトやハールレムなどのオランダ各都市の陶器職人たちは、それまでの技法を改良しつつ、白濁の錫釉を全体にかけ、陶器でありながら磁器のような表面を作り出した上に、中国風の文様を施した陶器を製作したのです。これがいわゆる「デルフト陶器」であり、現在は「ファイアンス陶」とも呼ばれています。政治的な状況により中国からの磁器輸入が不安定だった時期には、日本の伊万里などがオランダに運ばましたが、これに応じてデルフト陶器の中には日本風の絵付けがなされたものもありました。

東洋の磁器を真似ることをきっかけに生まれたデルフ



《和蘭陀白雁香合》 17世紀
[石川県指定文化財]

ト陶器ですが、数は多くはないものの、日本の大名や要人への献上品として、あるいは日本に磁器を注文する際の見本として、オランダから日本にもたらされたものがあります。また、オランダから一方的に送られてくる品々にあきたらず、茶道具などとしてより使い勝手のよい器を求め、日本の大名らがオランダに陶器を注文したという記録も残されています。

石川県立美術館所蔵の2点が、注文によって日本向けに制作されたものなのかどうか確かなことはわかりません。^{貞葉}の文様が施された《和蘭陀貞葉文様水指》は、日本に伝わったデルフト陶としてよく見かけられる種類の器で、もとは薬入であったといわれています。一方、《和蘭陀白雁香合》は、藤田美術館に類例がありますが、同様の形状のものはオランダでは見られず、日本からの注文に答えたものとも考えられます。いずれにせよ私たちはこの2点の陶器から、江戸時代の茶人たちの審美眼の柔軟さだけでなく、西洋と東洋のダイナミックな文物交流の様子をうかがい知ることができるのではないでしょうか。

(主任学芸員 今井 有)



《和蘭陀色絵貞葉水指》
17世紀

「加賀の伝統美 石川県立美術館所蔵名品展」

会期 2007年11月23日(金・祝)～2008年1月14日(月・祝)

※会期中、一部展示替えを行います。

休館日 月曜日(ただし、10月8日、15日、11月5日は開館、10月9日は休館)

観覧料 一般 800円(700円) 前売券 600円

高大生 600円(500円)

小中生 400円(300円)

※()内は20名以上の団体料金

※土日祝日は小中生無料

※障害者手帳をお持ちの方は無料(受付でご提示下さい)

映画鑑賞会 1月12日(土) 14:00～ 講堂にて 鑑賞無料

重要無形文化財(工芸技術)記録映画より

「蒔絵—松田権六のわざ—」

「蒔絵—大場松魚の平文のわざ—」

「蒔絵—寺井直次の卵殻のわざ—」

講演会 11月24日(土) 14:00～ 講堂にて 聆講無料

「石川の伝統文化」 講師：鷲崎 丞氏(石川県立美術館長)

災害と展覧会

—中越沖地震の報告または反省として

美術館にとって、最大の任務とは何だろう。芸術作品を美しく展示公開すること。それらの作品を未来に向けて可能な限り永久に残していくこと、という使命ではないだろうか。そのためには作品の保全に常に万全を期さなくてはならないのだが、時を選ばず予想を上回る災害が襲ってくることもある。天災とはまさにそのようなものであり、中越沖地震は中越地震からわずか三年後という「起るはずがない」と誰もが思っていた時期に起こった。

折しも当館では、「パリへ—洋画家たち百年の夢」を開催中だった。同展は東京芸術大学の創立120周年を記念する企画であり、日本近代洋画の成立と展開を回顧し、その将来的展望を開示することを意図していた。黒田清輝の《婦人像(厨房)》や浅井忠の《収穫》(重要文化財)、梅原龍三郎の《竹窓裸婦》、藤田嗣治の《タビスリーの裸婦》など、近代洋画史を彩る油彩が一堂に会していた。つまり、全国の名だたるコレクションの名品が百点余り、当館の展示室内に陳列されていたのである。通常展覧会では保険を掛け、地震のリスクもカヴァーしているが、全作品を無傷で所蔵先にお返しするのが美術館の最重要責務であることは言うまでもない。

7月16日(月・祝)午前10時13分、中越沖地震発生。美術館地域でも震度5の強い揺れを観測。館内では100人を越す来館者が展覧会を鑑賞中だった。幸い来館者に怪我はなく、また作品にも転倒落下等の異常がないことを当日勤務の学芸員が確認。休日中だった筆者は市内自宅から約30分後に登館して作品の無事を自分の目で確認した。



「パリへ—洋画家たちの百年の夢」展示室風景
(地震前の写真。本震の後、工芸を展示していたガラスケースは撤去した)

本震直後の点検では、作品を吊っているワイヤを壁に固定するガンタッカーが何カ所か外れ、作品名を記したキャプションが一枚外れて床に落下し、可動壁の位置が数カ所で3~5cm程度ずれていたことが地震の影響として認められた。来館者を無事館外に避難誘導した後、臨時休館とし、

午前11時半から点検開始、午後から作品のケアに当たった。余震の中での必要最低限の対処として、浅井忠の工芸品を展示ケースから撤収して収蔵庫に移動保管し、ずれの大きかった可動壁に掛かっていた絵画を壁から外して台車に固定する措置をとった。翌日は休館日であり、一日かけて展示の復旧及び作品の詳細な点検を行った。作品の被害は認められず、余震も鎮静化したため、翌18日から展覧会を再開する方針が定まった。浅井忠の工芸品については展示中止を決めた。



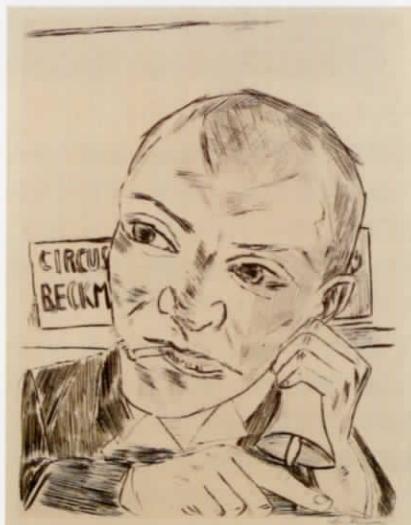
同展示室風景
(地震直後の写真。揺れの影響で作品を吊すワイヤが額側面にとび出している)

中越沖地震から二ヶ月が経った今、この「被害ゼロ」をいかに振り返るべきだろうか。十二年前の阪神淡路大震災以降、全国の美術館で展示方法が見直され、当館でも絵画用に落下防止バネ付きのフックを採用している。その絶大な効果は、中越地震時に絵画の被害が皆無に近かったことで証明されている。二度目の震災を経験し、もはや震度5~6クラスの地震であれば「作品を守れて当然」になっていることを再認識した。しかし、筆者は今展の展示作業中に「地震が来たらこれは危ないかな。でも多分来ないだろう」と考えたことを自戒の念を込めて思い出す。地震の後、展覧会を次会場に無事引き継ぐまでの数週間不安に苛まれたことも。それは万全を期すべき展示に「多分大丈夫」という甘い気持があったことが、作品への損傷となっていたら……という不安だった。地震の威力は人智を超えたものであり、いくら備えても憂いは完全にはなくならない。また、実際に地震が発生したら美術品のケアに悠長に専念できるような状況ではない。だからこそ作品の保全には、文字通り全神経を集中して「事前に」取り組まなければならぬ。学芸員として今回の「被害ゼロ」で感じた深く長い恐怖感を、自らの心に刻んでおきたいと思う。

(主任学芸員 平石昌子)

ドイツ語の題名「ヤールマルクト」の訳語は「年の市」だが、日本語の語感から市の賑わいを想像してこの連作を見ると違和感があるだろう。だが、ドイツ語では定期市だけでなく、市日に開かれる見世物小屋などの催事も指し、その意味で捉えれば理解しやすい。

10点一組の連作は、呼び込みに扮した作者の自画像で始まる。背後に「CIRCUS(サーカス)／BECKM(恐らくベックマンの名を指示)」と書かれているように、その後の9点で展開されるのはサーカスの舞台や舞台裏である。



第1葉《呼び込み》
[作者ベックマンの自画像]

「観衆の皆様、より近づいていただけますようお願ひいたします。恐らく10分間は、退屈させない心地よい光景をご覧に入れます。満足いただけない方には返金いたします。」〈年の市〉の呼び込みが叫んでいてもおかしくないものだが、本連作の前に出版された版画集〈地獄〉(1919年刊行)の扉絵にベックマンが記しているものである。〈地獄〉の場合は、第一次大戦が終結したものの流血の惨事が続く都市ベルリンの様子が赤裸々に批判を込めて描き出されている。口上に痛烈な皮肉が込められていることは言うまでもない。

〈地獄〉連作でも、自らが案内役を務めるように連作最初に自画像を置いていた。その構成を、〈年の市〉は踏襲している。だが、〈年の市〉では社会を撃つような鋭い批判の矢は潜められ、回転木馬や綱渡りに人生の暗喩を込めつつ、戯劇的な表現を楽しんで制作しているかのようだ。人生は一幕の劇、あるいは見世物、サーカスに過ぎないとでも言うかのように。とはいえ、第5葉《大男》では、通常の基準外であるからこそ見世物になっているはずの大男のほうが寧ろ身体の均整が取れていて、彼を晒し者にし、嘲る人々が、正当な比例を欠いて滑稽に表現されている。この場面表現は捕えられたキリストを群衆の前に引き出す「こ

の人を見よ」を想起させるが、愚かで醜い大衆の側に、自分の扱い画商であるノイマン、ピーバー、そして自分自身まで登場させているのだから、批判的な視点は徹底している。

ベックマンは生涯で370点ほどの版画作品を制作しているが、リトグラフとドライポイントが大半である。木版画でも魅力的な作品を生み出しているが、数は少ない。エッチングとなると最初期に例外的な作品があるだけである。彼はエッチングや木版画のようにイメージを生み出すまでに手数がかかるものよりも、石板か転写紙に直に描くりトグラフや、銅板に直接線を刻むドライポイントを好んでいた。この連作で用いられているドライポイントの場合、銅板に線を引っ掻いた際にできるわずかな金属の「まくれ」にインクが溜まり、線が滲んだようになるのが特徴である。ただ、数多く刷るとまくれが磨耗して、微妙な滲みの諧調が失われてしまうので、良い刷りを得るには自ずと限りが出る。

〈年の市〉は、ベックマンと旧知の、ミュンヘンで活動する出版者ラインハルト・ピーバーが1922年春に刊行し、和紙刷りの75部と手漉き紙刷り125部が世に出た。当館は和紙刷りの16番を所蔵。同じくピーバー社から出た版画集〈顔〉(1919年刊行、和紙刷り40部／手漉き紙刷り60部)が1920年春刊行の見本広告では早くも売切れているのに対し、こちらは1939年刊行の目録にも掲載されている。ただし、かの悪名高き「退廃芸術展」の出品作家の作品を、第三帝国時代のドイツで購入するものがいたかどうか疑問ではあるが。

(学芸課長代理 桐原 浩)

第5葉《大男》
[舞台上のひげの男がノイマン、
観衆の右手前がピーバー、左端
がベックマン]



アートに親しむ

～これがアートと思うものにあなたも挑戦～

美術館を楽しむ人々

美術館で美術作品を鑑賞する。一般的なとらえ方ですが、様子を見ていると必ずしもそうではないようです。美術館にはほとんど決まった時間に訪れロビーにあるレファレンスのソファに身を沈め時間を過ごしたり読書したりする人、図書コーナーでお目当ての作家の全集を眺める人、ワークショップや講演会に必ず顔を出す人、野外彫刻を散策する人…。人それぞれの活用方法があります。

もちろん美術館ですから、企画展はじめ常設展、ギャラリー等の展覧会に多くの方々の来館を願い、広報活動・作品解説会・来館団体への対応等日々奮闘しているところです。

本年度は、より多くの人が美術館を活用できるよう、これまで日曜日午後2時から行っていた作品解説会を毎週土・日曜日行っています。また昨年度來の体験型と参加型の二本立てのワークショップ開催ほか、映画鑑賞会・美術鑑賞講座や企画展・常設展毎の特別講演会やワークショップ・催し等多彩な事業を展開し、参加者も多く好評を博しています。

しかし、時に肩の力を抜いて考えると、いろいろな活用方法があっていいのではないかと思います。

アート体験コーナーの試み

「もっと気楽に美術館を訪れ、大いに美術館を楽しんでもらいたい」という思いがあり、9月から始まった常設展「楽しいアート・アートを楽しむ」の中で「アート体験コーナー」を設けました。

この展覧会では1960年代の長岡現代美術館賞展を中心とした現代アートの作品を展示していますが、表現の幅を広げた現代アートを追体験する場として、手づくりの「アートパズル」「碁石でアート」「形と色の組み合わせ」「ペーパー3D」の4つの体験コーナーを会場内の回廊に設置しま



「アート体験コーナー」で「アートパズル」に取り組む

した。

「あなたの作品を展示すると」と表示し、その場で展示したり、かんたんに額装したりすることを例示し、「あなたもアートボランティアに」と表示し、発展的な活動も呼びかけました。

学校団体の来館では児童・生徒が

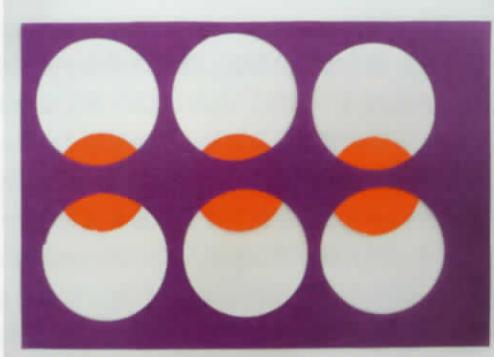
仲間で楽しんだり、土日には家族連れの子どもや若い2人連れ等が語らいながら気楽に取り組んだりする姿が見られます。試行錯誤の上、思わぬ形やほほえましい形ができ、新鮮な色の組み合わされた楽しい「作品」ができあがります。

来館者は美術作品を見るだけではなく、何かしたいという思いをもっていると強く感じます。多くの人々が美術館で積極的に楽しむことのできる場を提供できるよう今後も各種事業の計画的・継続的な展開を図っていきます。

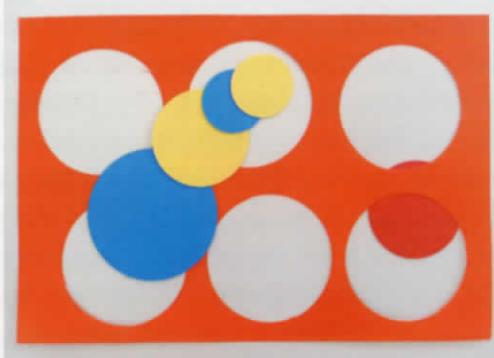
(学芸課長代理 池上秀敏)



「碁石でアート」の作品例



「ペーパー3D」の作品例



「形と色の組み合わせ」の作品例

運慶の当り年

新潟県立近代美術館長 水野 敬三郎

今年は運慶の当り年です。今年になって運慶の確実な作品が2点もふえたのです。一つは興福寺の木造仏頭、いま一つは横浜市称名寺光明院の大威徳明王像です。

興福寺の仏頭は、もとの西金堂本尊丈六釈迦如来像の頭部で、享保2年(1717)の火災に救い出されたもの、藤原兼実の日記『玉葉』の記事から文治5年(1189)にまだ金箔を押していない白木仏の状態だったことが知られていました。鎌倉時代初期の活力を感じさせるすぐれた作品ですが、その作者を示す史料はありませんでした。私は興福寺国宝館で初めてこの仏頭に接して感動し、それが運慶作である可能性を論じたことがありましたが、その後、伊豆願成就院諸像が文治2年の運慶作と判明し、それと比べると仏頭の方は造型にやや硬さが感じられ、耳の彫り方にも違いがあるように思われたので、運慶説を撤回して、いま遺作の知られていない成朝という仏師の作かとする説を唱えました。

今年の3月に、お茶の水図書館成賓堂文庫所蔵の『類聚世要抄』に見える運慶関係の記事が、文化庁の横内祐人氏によって紹介されました。それは鎌倉時代初期に興福寺別当を務めた信円の日記で、文治2年正月に西金堂の本尊を堂に安置したこと、大仏師は運慶で、建久5年(1194)に至って金箔を押されたことがはっきりと記されています。文句のつけようがありません。願成就院像は文治2年5月に造り始めているので、仏頭はその少し前に彫られていたわけです。運慶の作品に関してはかなりの自信があったのですが、だめでした。最近、国宝館で仏頭を再見し、その気品ある造型は運慶ならではのものと今更ながら感じ入りました。個人作家の作品比定の難しさを改めて痛感した次第です。

称名寺光明院の大威徳明王像は、解体修理に際し、今年の2月に像内納入文書が取出されて開かれ、建保4年(1216)に運慶が造ったことが明らかになりました。この4月から6月にかけて金沢文庫に出陳され、そのことが紹介されました。大威徳明王像は本来六面六臂六足で水牛に跨るという怪異な姿ですが、いま頂上の三面と右脇面、手足の多くと水牛も失っています。しかし本面や体幹部は表面の彩色・切金も含めてよく残り、像高21.1cmの小像ながら迫力十分、みごとなできです。私も数年前にこの像を拝見する機会があり、感心したのですが、運慶その人に結びつくとは思い至りませんでした。やはり自信は持たない方がよさそうです。

像は真言などを記した納入紙片の奥書により、源氏大式が発願した大日・愛染・大威徳の三体の内とわかり、また「巧造肥中法印運慶也」とありました。巧造は巧匠、肥中は備中と書くべきところ、多分仏師や運慶のことについて詳しくな

い人が記したのでしょう。注目されるのは源氏大式で、この人は甲斐源氏の加賀美遠光の娘である大式局に当ると思われます。大式局は『吾妻鏡』によると源頼家の養育係、ついで実朝が誕生すると実朝の養育係に転じた人で、建暦3年(1213)の和田義盛の乱では実朝の無事のために働きがあつたらしく勲功として領地を賜りました。その人の発願ですから実朝の息災などにかかわる造像だった可能性もあります。運慶と東国武士の密接な関係を物語る具体的な事例として貴重な発見であり、また建暦2年完成の興福寺北円堂造像後の晩年にも、運慶が旺盛な活動を続けていたことを示す嬉しい遺品です。



仏頭 奈良興福寺

大威徳明王像
称名寺光明院

イベント情報

2007年10月～
2008年3月

企画展

- 10/ 6(土)～11/11(日) 「日本のわざと美」展
—重要無形文化財とそれを支える人々—
11/23(金祝)～1/14(月祝) 加賀の伝統美 石川県立美術館所蔵名品展
2/15(金)～3/30(日) 新潟の写真家たち展

所蔵品展示

- 9/ 5(水)～11/11(日) 楽しいアート・アートを楽しむ
11/16(金)～2/ 3(日) 自然主義の系譜 [図①]
2/15(金)～3/30(日) 画家たちの青春展 [図②]



①ジュリアン・デュプレ(羊飼い) 1883年



②版木男(酒樂(さかほがい)) 1958年

映画鑑賞会 (無料／講堂にて／午後2:00～)

- 3/15(土) 溝口健二「近松物語」(1954年)

共催展

- 1/19(土)～1/27(日) 新潟県ジュニア美術展覧会長岡展

ワークショップ (参加無料／エントランス集合／午後2:00～)

- ◆「びじゅつ☆体験隊」
10/14(日)「足アートのグニャグニヤ凧を飛ばそう」
◆「発見！びじゅつかん」
11/25(日)「コレクション通PartⅢ —所蔵品の秘密を探れ—」

講座 (聴講無料／講堂にて／午後2:00～)

- ◆館長による美術史連続講座(館長 水野敬三郎)
第1回 10/13(土) 「快慶の彫刻」
第2回 10/27(土) 「宋代美術と鎌倉彫刻」
◆美術鑑賞講座
12/ 8(土) 「横山操と新潟」(副館長 横山秀樹)
1/26(土) 「美術教育における鑑賞」(学芸課長 長谷川重雄)
2/23(土) 「新潟の写真家たち」(学芸課長代理 桐原浩)

ミュージアムショップより おすすめの一品

紙で紙を切る—『Paper made paper knife』…3,990円
(税込)



ミュージアムショップ KINBI
TEL 0258-28-2200

本来切られる存在である紙を切る道具として実現化した世界初の紙製ペーパーナイフ。自然素材からできているため肌触りは優しく、また木の葉のフォルムは持ちやすく手が滑っても刃先に触れるのを防いでくれます。使う人と環境を考えて生み出された本品は、2005年にデザイン・プラス賞(ドイツ)とグッドデザイン賞を受賞しました。

万代島美術館情報

■「民衆の鼓動 韓国美術のリアリズム1945-2005」

10/6(土)～11/25(日)

■「所蔵品展 ゴヤ版画展」

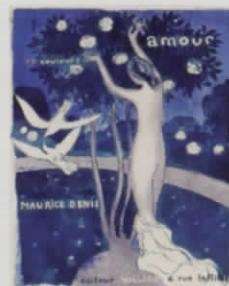
12/8(土)～1/27(日) [図③]

■「所蔵品展 美術の森」

2/2(土)～3/23(日) [図④]



③フランシスコホセ・ゴヤ・イ・ルシエンテス
(カブリーチョス) より 1799年



④モーリス・ドニ《アムール(愛)》より
表紙 1892-1899年

The Niigata Bandaijima Art Museum
新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市万代島5-1 (朱鷺メッセ内 万代島ビル5F)
TEL 025-290-6655 FAX 025-249-7577 ホームページ www.lalanet.gr.jp/banbi/

利用案内 (10月～3月)

■開館時間／午前9:00～午後5:00(10・11月のみ毎週金曜日は午後6:30)

※観覧券の販売は閉館30分前まで

レストラン／午前10:00～午後5:00

(10・11月のみ毎週金曜日は午後6:30まで)

※ラストオーダー[食事]午後4:00

(10・11月のみ毎週金曜日は午後5:50まで)

[飲物]午後4:30

(10・11月のみ毎週金曜日は午後6:10まで)

ミュージアムショップ／午前9:00～午後5:00

(10・11月のみ毎週金曜日は午後6:30まで)

■休館日／月曜日(月曜特別開館日あり)

※ただし月曜が祝日の場合は開館し、翌日休館します。

(10/9、12/25、1/15は休館)

10/15、11/5、12/3の月曜は開館します。

※11/12月～11/15休は展示替えのため休館します。

※12/29(土)～1/3(休)は年末年始のため休館します。

※2/4月～2/14(休)は保守点検のため休館します。

■観覧料金

●企画展

企画展によって観覧料が異なります。

なお、企画展の観覧券で、常設展示室1・2・3もご覧になれます。

●常設展示室1・2・3

・一般／410円(330円)

・中等教育(後期)・高校・高等専門・大学／200円(160円)

※学生証を提示してください。

・小学・中学・中等教育(前期)／100円(80円)

※()内は20名以上の団体料金です。

※小・中学生は土・日・祝日の観覧料が無料になります。

※障害者手帳をお持ちの方は無料になります(受付にて手帳をご提示ください)。

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第29号

THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART

編集・発行 **新潟県立近代美術館**

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14

TEL 0258-28-4111㈹ FAX 0258-28-4115

<http://www.lalanet.gr.jp/kinbi/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 株式会社 中央印刷

(〒940-0041 長岡市学校町1-9-21 TEL 0258-35-3500)

発行日 2007年10月20日